

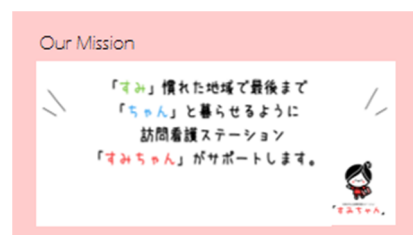
令和5年度職能合同交流会を開催しました

1. 日 時：令和5年9月30日（土）13：00～16：00
2. 会 場：岩手県看護研修センター
3. 目 的：健康と療養のための全世代型包括ケアシステムを支える看護職の役割を理解し、各職能がさらに連携を推進し裁量を発揮していくために、県内における地域の特徴を生かした看護の先進事例・好事例を学び、今後の支部活動への示唆を得る機会とし開催する。
4. 参加者：52名（保健師職能15名、助産師職能8名、看護師職能I15名、看護師職能II10名
副会長、専務理事、常務理事2名、内、支部職能委員等27名）
5. 内 容：講演・意見交換（グループワーク）
テーマ：「医療と暮らしをつなぐ看護の力ー健康と療養を支える看護職の連携と裁量発揮に向けてー」
講師・助言者：未来かなえ訪問看護ステーション「すみちゃん」 所長 高橋 利果 氏

人口約4,700人、高齢化率47%超の住田町に平成31年4月に開所した未来かなえ訪問看護ステーション「すみちゃん」。「すみ」慣れた地域で最後（期）まで「ちゃん」と暮らせるようにサポートすることが使命と高橋所長の力強いお言葉でした。高橋所長が看護師として病院に勤務していた頃、治療中の患者が発した「家に帰りたい」「海が見たい」等の言葉が、ホスピス発祥の地イギリスに渡り、「緩和ケア」を学ぶきっかけになったそうです。「自分らしく生き抜く」ためには「選択」が重要。医療資源が乏しい過疎地域であっても「家に帰りたい」「家で静かに逝きたい」という選択を諦めてほしくない、そのような思いで、患者や家族に一つでも多くの選択肢を提供し、自分らしく全うできるよう支援しているとお話でした。その中で、地域の看護師に求められることは、特にも医療過疎地域においては、急変時のサインを見逃さず、患者や家族に「何が起きているのか」を適切に伝え、「次に何が起きるのか」まで見通せる「先見性のある」看護を提供すること、また、患者や家族が「理解し納得から行動変容」できるように伝える力が必要であり、併せて、その土地に伝わる風土や習慣をケアに取り入れる「創造」する力や住民等に「慕われる」人間性や、その地域に「溶け込む力」が必要であるとお話でした。

現在、高齢者だけではなく、医療的ケア児への訪問看護もしており、その中で、多職種連携による連携救急体制の構築や、自宅以外への訪問看護の提供、住田町医療的ケア児等在宅レスパイト事業も実施されているとのことでした。また、訪問看護は、医師の訪問看護指示書のもとに提供されるものであるが、必要な情報が記入されていないことが多く、自ら情報収集に動くとのことでした。

バイタリティ溢れる高橋所長のお人柄やエピソードに、「熱意を感じた」「行動力がある」「情報を集める力や情報を発信する力がすごい」等の感想が多く聞かれました。言葉（方言）の理解に苦労したと話す高橋所長でしたが、そのコミュニケーション能力の高さと患者や家族を第一に寄り添う心は、地域の看護師に求められるものそのものでした。



講義後は、「健康と療養を支える看護職の連携と裁量発揮に向けて、私達ができること」について、グループに分かれ意見交換を行いました。「顔の見える関係づくりをしていきたい」「できないではなく、どうしたらできるのかを考えていくことが大切である」「カンファレンスも顔を合わせて実施する」「退院後、地域での生活を思い描き支援できるような研修を導入する」「病院・地域・行政や教育機関と情報共有をする」等活発な意見交換ができました。参加者より、「多職種との意見交換は気づきが多く、交流会への参加はとても刺激になった」との感想が聞かれました。

【意見交換の様子】

